

【相合傘】

あいあいがさ

■意味

一本の傘を、男女二人が差していること。

■用例

雨が降りしきる中、彼と彼女は仲良く相合傘に入つて歩いていている。

*

恋人同士が手をつないで歩こうと、腕を組んで歩こうと、いまは目を引くこともない。だが、「男女七歳にして席を同じくせず」と言っていた時代には、相合傘で歩こうものなら、通行人の注視を浴びたものである。今日では一人とも傘を持っているのに、わざわざ一本の傘に入つて歩くカップルも多い。

噂になつてゐる二人の名前を相合傘の絵に並べて書く、やつかみ半分の落書きが、かつてはよく目についた。ひそかに想つてゐる男性と自分の名前を、ノートに相合傘で書き込んで胸をときめかせる女生も多かつたようだ。思えば、男女ともに純情な時代であつた。

【逢引き】

あいびき

■意味

男女が密会すること。

■用例

あの二人は、神社の境内でこっそりと逢引きしている。

*

この言葉は、敵味方が合意の上で、互いに陣地から撤退すること（「相引き」）からきた。

これが転じて、男女双方が申し合わせ、人目を避けて忍び逢うさまを「逢引き」というようになつた。不倫の恋や、親が許さない仲の密会が多かつた。

江戸時代には不忍池しのばずのいけのほとりに出合茶屋が並び、男女の逢引き場所になつていた。今までいうラブホテルである。「出合茶屋 憶れた方から払いする」（江戸川柳）。

出合茶屋の席料は一分いちぶだったといわれ、今なら三万円ほどに当たろうか。かなり高い。裕福な商家の女房などが、若いツバメをくわえ込むケースが多かつたようである。